

研究報告

博物館資料としての古文書の活用 —「用田村伊東宗兵衛家文書の世界」展を開催して—

* 富田 三紗子

1. はじめに

多くの地域博物館では、歴史資料として古文書を所蔵している。それらが地域の歴史を語る上で貴重な資料であることは言うまでもないが、博物館の中核的な機能を展示と捉えた時(1)、博物館事業として古文書を活用することには限界がある。なぜなら、古文書の展示は構成が平面的であり、一般受けしにくいと言われており、展示での活用では不向きだと考えられるからだ(2)。

一方で、昨今は古文書解読ブームであり、各地で行われている古文書解読講座では定員が満員になるという話をよくきく。また、展示であっても、四コマ漫画でキャプションを書いたり(3)、古文書の書状という形態に着目して中世の書状を作るコーナーを設けたり(4)、展示の工夫次第で、老若男女問わず関心を引くことができるとも言われている(5)。

大磯町郷土資料館(以下、当館)では、博物館としての活用が難しい古文書を、古文書裏打ちクラブや古文書解読クラブと言った市民のボランティアサークルで活用し、本年度(平成27年度)は、この両クラブで扱ってきた用田村伊東宗兵衛家文書(以下、伊東家文書)を、修復と解読の成果として企画展の題材にした。企画展の準備には、古文書解読クラブの有志にも関わっていただき、作業を進めた。このように、博物館において古文書の整理や調査を市民と共に行い、展示を行う活動は決して目新しいことではないが(6)、本稿では、これらの一連の活動を通して筆者が感じた博物館活動における古文書の活用の効果を、改めて考察したい。

2. 用田村伊東宗兵衛家文書の概要

一連の企画で対象とした伊東家文書は、平成11

(1999)年に大磯町内在住の方から寄贈いただいた古文書群である。総点数389点、江戸時代後期から明治時代初期を中心とした、いわゆる地方文書である。

用田村とは現在の藤沢市用田のことであり、この古文書群は、実は、大磯町内の地方文書ではない。縁戚関係から大磯に伝わったものであり、寄贈いただいた当初からこのことはわかっていたが、大磯に伝わった資料として当館で所蔵していた。当時、当館に歴史担当の学芸員が配属されていなかったこともあり、この古文書群はしばらく整理されなかったが、平成24年度から当館が主催する市民のボランティアサークル、古

文書解読クラブ(以下、解読クラブ)において解読を進めることによって、その全容が明らかになった。

伊東宗兵衛家は、用田の旧家伊東孫右衛門家の分家であり、用田の有力者として伝わる伊東三家の内的一家である。『新編相模国風土記稿』によると、伊東家は伊豆国の伊東氏に系譜があると伝わり、天正年間(1573～91)頃、伊東孫右衛門祐矩が用田村を開いたと言われる。祐矩には子が4人いたが、長男が出家したため二男が孫右衛門家を継ぎ、三男市郎兵衛、四男宗兵衛が分家した。この三家が伊東三家であり、当館が所蔵している伊東家文書は、この内の一家の宗兵衛家のものである。

用田には伊東家に関する古文書が伝わっておらず、『藤沢市史』にもこの地域の記述は少ない。このことから、当館が所蔵する伊東家文書は、用田の地域にとって貴重な資料であることがわかった。しかし、大磯町営の地域博物館として活動する当館にとっては、正直、活用の機会が限られてしまう資料である。資料そのものは、大磯に直接的な関係を持たない地域の資料であり、企画展示の題材にはなりにくい。展示の題材にするのであれば、大磯で展示を開催するという裏付けが必要である。当初から明確な計画があったわけではないが、結果として、この資料は、まず当館の教育普及事業で活用することになった。

3. 教育普及事業での活用

当館では、平成16年度から古文書裏打ちクラブ(7)(以下、裏打ちクラブ)を開催し、所蔵する古文書の修復を市民ボランティアの手によって行っている。もともと、隣の市の平塚市博物館において裏打ちの会という同様のサークルが開催されており、そのサークルのメンバーの一部が当館の裏打ちクラブの講師兼会員として活動を行い、新しい会員に指導するかたちで始まった。原則として毎月第三土曜日の午前10時から午後3時頃という月1回の活動を現在まで続けている。会員数は15～20人前後を推移している。

筆者はまだ在職していなかったため、当時の記録によると、クラブを開始した翌年の平成17年頃から伊東家文書の裏打ちを始めたようである。この時、クラブの会員の中に、古文書整理を経験していた者がいて、ある程度の封筒分けや資料名、資料番号の記載が行われた。しかし、この時はまだ、当館に歴史担当の学芸員が配属されていなかったため、それ以上の整理が行われることはなかった。

その後、歴史担当の学芸員として筆者が配属され、平成24年度から解読クラブを開催することにした。博物館や文書館が行う古文書解読に関する事業には講座形式のものが多く、解読クラブでは参加者と共に所

(* 当館学芸員)

蔵する古文書の解説を進めることによって、所蔵資料の整理や活用を促進することを目的とした(8)。

このようなクラブを開催することにした背景として、当館における一つの課題があった。当時、筆者は、8年間続けられた裏打ちクラブで修復された資料が未整理のままであり、クラブの活動を続けることによって資料が蓄積され続ける状況に頭を悩ませていた。そこで、解説クラブにおいてそれらの未整理資料の解説を進め、資料整理を少しでも進めたいと考えた。

解説クラブの活動頻度は、裏打ちクラブと同様に月1回とし、原則として毎月第一土曜日の午後2時から4時とした。会員数は15人を上限に11～14人で活動し、退会者が出た場合に年度を単位として新たな会員を募集している。

裏打ちされた資料は襖の下張り資料など、様々な種類の資料があったが、初心者も含めた市民と共に解説を進めるためには、ある程度一般的な地方文書群の構造を持った資料群の方が扱い易いと判断し、唯一その体裁を持っていた伊東家文書をまずは対象とした。ただし、解説クラブを始めた時点では、伊東家文書の全容がほとんどよくわかっていなかったため、まずは、裏打ちクラブの会員が行った整理作業を引き継ぐかたちで筆者が仮目録を作成し、その中からテキストを選択して解説クラブの活動を始めた。

解説クラブの趣旨としては、会員が自主的に古文書を読み進めることが望ましいが、会員募集の際に初心者も入会可能としたため、予め伊東家文書の中から選択したテキストを配布し、参加者に予習をお願いして、クラブの当日に輪読してもらったものを、担当学芸員

である筆者が解説するかたちも平行した。解説クラブの初年度の活動は、表1の通りである。

初回はガイダンスとして、活動内容の説明や、古文書の解説や調査方法を解説し、2回目に初回で配布したテキストの輪読を行った。この時、参加者の習熟度を見極め、参加者自身の希望も聞きながら、3回目以降は、輪読形式で進める学習班と、仮目録から関心を持った古文書を選択し自主的に解説を進める筆写班とに分けて活動を進めた。4回目以降は、筆写班の会員が解説した古文書を、解説した本人が学習班の会員に対して解説する時間を設けた。次第にこの時間が長くなってきたため、平成25年度の活動から、筆写班が解説した古文書の中からテキストになりそうな古文書を筆者が選択し、解説した会員に解説していただくことにした。つまり、学芸員の役割を参加者をお願いすることにしたのである。

筆写班の会員は、もともと解説クラブに参加する前から、他館やカルチャーセンターなどで開催された古文書解説講座に参加したことがあるなど、古文書を解説したことがある方が中心になっていたため、自身で解説する能力が十分にあった。彼らに講師のような役割をお願いすることによって、その能力を所蔵資料の整理や調査に結び付けたいと考えたところ、その能力は思いのほか発揮され、筆写班の会員は自主的に解説した古文書の内容に関連する研究書などを調査し、学習班の会員に発表する際、古文書の背景などを解説するまでに至った。さらには、月1回の頻度では足りないという意見が出たため、平成26年度から筆写班については毎週金曜日にも自主的に解説する時間を設ける

表1 古文書解説クラブ平成24年度の活動

回数	年月日	内容
1	平成24年8月4日	ガイダンス(活動内容や古文書の解説・調査方法について)
2	平成24年9月15日	平成24年度第1回解説資料の解説、学習班と筆写班の班分け
3	平成24年10月6日	学習班:平成24年度第2回解説資料の解説 筆写班:各自で伊東家文書の中から興味を持った文書の解説
4	平成24年11月3日	学習班:平成24年度第2、3回解説資料の解説 筆写班:各自で伊東家文書の中から興味を持った文書の解説、解説した文書の発表
5	平成24年12月8日	学習班:平成24年度第3回解説資料の解説 筆写班:各自で伊東家文書の中から興味を持った文書の解説、解説した文書の発表
6	平成25年1月5日	学習班:平成24年度第3回解説資料の解説 筆写班:各自で伊東家文書の中から興味を持った文書の解説、解説した文書の発表
7	平成25年2月2日	学習班:平成24年度第3回解説資料の解説 筆写班:各自で伊東家文書の中から興味を持った文書の解説、解説した文書の発表
8	平成25年3月2日	学習班:平成24年度第3、4回解説資料の解説 筆写班:各自で伊東家文書の中から興味を持った文書の解説、解説した文書の発表

ことになった。

また、次第に古文書の内容を明らかにしていく中で、一度、古文書が作成された用田の現地見学を行いたいという意見が出た。会員の中には、既に自主的に用田を訪ねた者もいて、クラブの中で現地の様子を報告していただいた。そして、平成25年12月8日に、解読クラブ参加者の有志で用田の現地見学会を開催した。伊東家文書の中には、当主が描いた用田の地図などがあり、現地を見学することによって土地勘を得ることができた。

古文書は解読して内容を理解することによって、初めてその価値を見出すことができる資料である。博物館資料として保管する場合、博物館事業の主たる活動となる展示による活用だけでは、古文書に対する知識がある程度ある人でなければ、理解を深めることは難しいだろう。しかし、博物館事業の中でも展示以外の教育普及事業であれば、当館の解読クラブのように古文書を深く読み込み、参加者によっては自ら関係資料を調査するという意識も芽生え、さらにはフィールドワークにも展開するなど、古文書を活用して様々な活動に結び付けることができる。博物館において展示以外の教育普及活動が注目されるようになったのは、1970年代半ば以降と言われる(9)。以来、博物館においては、様々な種類の講座やサークルが開催されてきた。展示には不向きな古文書も、それらの活動の対象として活用すれば、博物館資料として大いに活用できる。

4. 企画展の開催

裏打ちクラブと解読クラブで活用してきた伊東家文書も、解読クラブでの活動によって内容が次第に明らかにされ、寄贈者から直接話を伺うことによって大磯と用田のつながりも見えてきた。折しも、藤沢市文書館で用田を含めた御所見地域の悉皆調査の見直しを行い、報告書を作成するという事で、当館が所蔵する伊東家文書のマイクロ写真撮影が行われた。当館としても伊東家文書の存在と地域的なつながりを発表したいと考え、平成27年度に企画展を開催することにした(10)。

企画展の開催趣旨は、当館のクラブ活動の成果を基軸として、伊東家文書を網羅的に展示し、用田村の概要、伊東宗兵衛家を介した用田と国府(大磯)の関係を紹介することとした。展示内容を解読クラブの成果と結び付けたいと考えたので、前年度から筆写班で始めた毎週金曜日のクラブ活動を展示の準備作業に当てた。年度当初に計画した展示準備の予定は、表2の通りである。

この時、筆写班の会員として展示準備に携わった会員は5人いた。その内、4人の方には、伊東家文書の中から一つのテーマとなる古文書を選択していただき、企画展示室の一つのコーナーを担当して展示を行って

表2 古文書解読クラブによる展示準備予定

月	日	内容
4	10	打合せ、テーマ選定
	17	テーマ選定
	24	テーマ決定
5	8	図録原稿作成・調査
	22	
	29	
6	12	
	19	
	26	
7	10	図録原稿〆切
	17	
	31	
8	7	図録原稿修正・調整
	14	図録内容確定
	21	図録原稿修正・調整、展示構成の検討
	28	
9	4	図録最終確認、展示構成の検討
	11	展示構成案提出
	25	展示解説文の提出
10	2	展示準備
	9	
	16	
	23	
	24	展示開始

いただくことにした。また、この作業と関連して、図録の一つのテーマを担当していただき、原稿の執筆もお願いした。ここまでの作業をお願いするには、特定の古文書に向き合い、自ら古文書の内容を理解し、関連の事象を調査する意欲がなければ難しい。5人の内1人は、そこまでの作業をすることは難しいが、展示内容に対する意見交換や、展示資料の列品などの作業については参加したいという意向であったため、その作業をお願いすることにした。

博物館の展示作業に市民が携わることは、既に他館でも行われていることであり、目新しいことではない(11)。博物館資料としての古文書の活用という視点から述べるのであれば、市民が特定の古文書を対象として一つの展示を制作したり、図録を作成したりすることによって、古文書に対する理解は大いに深まる。最早、この作業を行うことは、一次資料から歴史叙述を行う作業に携わることになるからだ。また、自身が調査した古文書には自ずと愛着が湧き、会員によっては自分の展示を多くの人に見てほしいという欲求につながったようである。結果として、解読クラブの会員の家族や知人に企画展のチラシを配っていただくことにより、宣伝効果も高まった。

3年程古文書の解読を行い、一種の愛着を持った解読クラブの会員であれば、その古文書を題材とした展示に興味を持つことは自然である。それでは、解読クラブと無関係の来館者は、伊東家文書の展示にどのよ

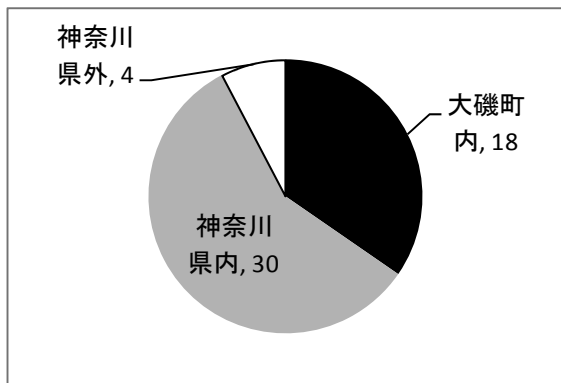
うな感想を持ったのだろうか。

この展示の来館者数は、42日間開催して4,594人であり、1日平均109.38人であった。当館の企画展は、だいたい4,000人程度の来館者数であれば通常の水準であるため、他の企画展と比較しても人数に遜色はないと言える。しかし、来館者数よりも来館者が展示を見学してどのような感想を持ったのかが重要である。当館では、企画展開催時にアンケートを行い、①住まい、②来館回数、③企画展に対する意見と感想を求めている。その内、③の意見と感想から、伊東家文書の展示に対する来館者の印象を考察する。

期間中、52枚のアンケートを集めることができたが、自由記述の欄には3件の要望があったにせよ、良かったという感想が4件、展示内容に関する感想が28件、常設展示の感想などその他の感想が13件と、概ね好評を得ることができた(12)。今回割合として特に多かった感想が、展示内容に関する感想である。

展示担当者としては、今回の展示が大磯町という地域外を題材としている展示であることを早くから有効に活用したいと考え、新聞記者へのアピールや現地である用田への宣伝を行ってはいった。その結果、**図1**の通り大磯町外からも多くの方が来館した。

図1 企画展アンケートによる住まい別の来館者数



町外において当企画展に関心を持った方の多くは藤沢市在住の方であり、感想の中には地元地域に対する理解が深まったというものが多くある。以下にいくつかを紹介する(13)。

- ①新聞報道で企画展を知りました。伊東家と用田のことは何年か前、本で知りました。展示物の解説がとてもわかりやすく、大変おもしろかったです。大磯町なのに藤沢、用田のことをこれほど研究しているのは大変うれしいことです。(藤沢市、初めて、男性、47歳)
- ②用田村の八右衛門の事を調べていて、何かつながりがあることが分かり、意義深い見学になりました。(横須賀市、初めて、男性)
- ③立ばな展示会が開かれ勉強させていただきました。

ありがとうございました。藤沢の住人。(県内、初めて、男性、83歳)

- ④私はS13年用田に生まれ、20才までそこで生活しました。用田村があったことをはじめて知りました。用田地域の人達にとって貴重な資料、ぜひ地域の子供たち大人たちにも来館してほしい。私は仙台での生活がもう40年になりますが、郷土の歴史がほんの少し判って良かった。ありがとう。(宮城県、初めて、男性、79歳)
 - ⑤用田に住んでいる者にとってはうれしいしいであります。(藤沢市、初めて、男性、70歳)
 - ⑥たまたま友人に大久保烏山藩の三家老の一人を先祖にもつ人がおり、烏山藩の出生は「世田谷烏山もそうだよ」とはきいていました。神奈川にも烏山藩の飛地があり、江戸末期藩財政ひっばくのようす、リアルに読んで興味深かったです。(中略)ありがとうございました。古文書解説、うらうち、ごくろうさまでした。(埼玉県、初めて、男性、65歳)
 - ⑦用田村が当時交通の要所であったことははじめて知り興味深くお話ししました。次回の展示があれば又来館したいです。ありがとうございました。(藤沢市、2回、女性、69歳)
 - ⑧示現寺～伊東幾右衛門家の間に住んでおりますので、来ました。住んでいる用田のことですが、初めて知ることばかりでとても参考になりました。ありがとうございました。(藤沢市、5～6回、男性、66歳)
 - ⑨普川家の友達と私の友人が伊東家(オランダに移住)の為、関係があるのではと来館しました。(藤沢市、初めて、男性、72歳)
 - ⑩ご近所の事なので、特に興味深く歴史を知る事ができ、ありがとうございました。(町内、3回以上、女性、50歳)
 - ⑪すばらしい。藤沢用田の人たちにも興味深いはず。藤沢に伊東さんという知人がいるので知らせます。ありがとうございました。梅沢のみこし大工もいとお話。(町内、3回以上、男性、69歳)
- ①、③、⑤、⑦～⑨の感想については、地元地域であることから親近感を持ち、展示内容に興味を持っていただいたという感想である。親近感という点では、②のような玄人の感想や、④、⑥のような偶然性まで興味深い。また、⑩、⑪のように町内の方でも、用田を近所と捉えたり、知人がいたりして親近感を持っていただいた。
- 博物館に来館する人のニーズとして「身近な歴史や自分の知っていることを確かめたい」という欲求があり、来館者は、現在あるものと昔の姿を比較したり、自分の生きてきた時代を振り返られる展示に共感や親近感を寄せたりすることによって、展示に興味関心を

持つ(14)。つまり、来館者は常に自分の問題関心や興味から展示資料を見ているため(15)、その問題関心や興味に展示内容が合致した時、その展示が面白いという評価になる。展示に不向きと言われる古文書であっても、内容が来館者と縁のある地域のことであれば、興味を持ってもらえるのである。

現に、伊東家文書の展示では、展示解説を2回開催したが、初回は約50人の参加があり、当館の企画展示室(84.12㎡)から参加者が溢れていた。このようなことは、筆者が担当した展示解説では初めてのことである。なるべく、地域のことに引き付けて宣伝した結果だと考えているが、今まで知られていなかった地元の歴史という題材には、一般の方も潜在的な関心を持っているのだろう。

また、今回の展示が裏打ちクラブや解読クラブの活動を通してまとめた内容であったことから、次のような感想を得ることができた。

- ①資料解説が丁寧でよいと思いました。裏打ちクラブのような地道な活動を続けられていることに頭が下がります。(鎌倉市、3回、女性)
- ②近世、近代、現代と時間のつながりと地域のつながりを市民活動20年の成果としての展示とできている事が素晴らしい。資料保存、解読の実りも大きく深く掘り下げた内容でした。展示内容も図録よりも判り易く説明、工夫をして頂いてよかったです。(後略)(秦野市、10回、男性、48歳)
- ③展示資料が整然と並べられ、かつわかりやすい解説に感銘を受けました。住民の方々と古文書を修復しながら、さらに解読を行っていることは、とても大切な館の活動だと思いました。この会の今後の発展をお祈りいたします。(横浜市、3回、男性)
- ④こうした地域の歴史を地道にほり起こしていただき感激です。古文書の裏打ちが史料と歴史をよみがえらせた。(横浜市、10回以上、男性)
- ⑤古文書裏打ちがとても細かい作業であることがよくわかりました。古文書の中にはいろんな情報が詰まっているので大事なことだと思います。お疲れ様でした。(藤沢市、3回以上、女性、57歳)

いずれも地域資料の保存活動に対する理解を示す感想であり、展示企画者としては有り難い感想である。市民がクラブ活動を通して地域資料の保存に携わっていることを知り、地域資料保存の大切さを実感いただけたのではないだろうか。

さらに、古文書の展示に対しては、やはり文字への関心も高いことが窺えた。内容より書への関心という点もニーズとして汲み取ることができるようだ。

・湯河原の帰りに寄りました。私は、個人の書道教室で、古典について生徒さんに説明しますが、この様に実際に江戸時代の字を見る機会はとても大

切な事ですので、今後もぜひ企画を続けていただきたいと思います。(横浜市、初めて、女性、44歳)

展示に不向きと言われる古文書も、工夫次第では展示資料として活用できることは、先行研究でも示唆されている通りである(16)。来館者が自身の関心や興味に引き付けて展示資料を見ることを考慮し、そのニーズに合った工夫があれば、古文書も博物館展示として十分活用できるだろう。今回開催した伊東家文書の展示は、そのことを実感する展示企画となった。

5. おわりに

本稿では、古文書を対象とした博物館事業の事例として、伊東家文書を対象とした裏打ちクラブと解読クラブの活動と、その成果を発表した企画展について、その事業内容をまとめた。最後に、一連の活動を通して得られた博物館事業における古文書の活用の効果についてまとめる。

博物館は、博物館法第2条に定義されている通り、資料を収集し、保管し、展示し、教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、資料に関する調査研究をすることを目的とする機関である。本来は、これらの目的をバランス良く事業として進める必要があるが、多くの博物館では、展示業務が博物館事業の中核を占め、一般的にも博物館＝資料を展示する場所と捉えられている感否めない。一方で、先述した通り、近年では教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業としての教育普及事業が注目され、各地の博物館で様々な講座やサークルが行われている。当館の裏打ちクラブと解読クラブは、このような博物館の教育普及事業の一つであり、古文書の修復や調査研究に市民が関わることによって、まずは参加者から古文書に関心を持っていただくことができた。そして、その活動の次の段階として展示を行うことによって、展示を通して来館者に対して古文書の保存、修復、調査研究に対する興味を持っていただくことができた。博物館事業における教育普及事業から展示事業への段階を踏むことによって、一般市民に対しても古文書に対する興味を持つ企画展を開催できたのではないかと考えている。

当館としては、本稿で紹介したような企画を、今回の伊東家文書に関して初めて行い、他に事例を持っているわけではない。今回の事例を踏まえて、引き続き同様の活動を行い、一般市民に対して古文書の保存、調査研究に対する関心をさらに醸成することができれば、博物館活動として一定の効果を得ることができるだろう。古文書は展示に不向きと諦めるのではなく、博物館事業として活用することによって、多くの人々に地域資料の保存の大切さや活用方法を理解してもらうことができるのであれば、地域資料保存に対する環

境も変化していくのではないか。博物館における古文書の活用が、今後さらに進展することを望む。

注

(1) 木場一夫『新しい博物館—その機能と教育活動—』日本教育出版社、1949年、p. 26に言及されていることから始まり、最近も青木豊「展示の概念」(青木豊編『人文系 博物館展示論』雄山閣、2013年)では木場氏の言及を引いている。

(2) 林英夫「歴史系資料館と歴史学」(『歴史評論』451号、1987年)。田中淳一郎「古文書の展示と地域資料館—京都府立山城郷土資料館の活動—」(『歴史評論』483号、1990年)も林氏の言及を受けて考察している。

(3) 米谷博「古文書をやさしく展示する—歴史資料の展示方法をめぐって」(『Museum ちば』38号、2007年)

(4) 築瀬大輔「古文書展示における補助資料の効果的活用—地域連携の中で試みた古文書ハンズオン」(『群馬県立歴史博物館紀要』36号、2015年)

(5) 前掲注2、田中淳一郎(1990年)

(6) 土井浩「博物館活動と近世史研究」(青木美智男ほか編『講座日本近世史10 近世史への招待』雄斐閣、1992年)による平塚市博物館の事例は現在も継続している活動である。また、近年では、千葉県の野田市郷土博物館で開催された市民の文化活動報告展「読んでみました野田の古文書～初心者が挑んだ3年間の整理・解説・調査から～」(平成24年12月22日～平成25年3月25日開催)の事例がある。

(7) 開始当初は、古文書裏打ちの会という名称であった。

(8) 前掲注6の野田市郷土博物館の事例を参考にした。

(9) 大堀哲「教育とは何か」(大堀哲ほか編『新博物館学教科書 博物館学Ⅱ—博物館展示論*博物館教育論』学文社、2012年) p. 172

(10) 展示の詳細については、当年報 p. 5の報告を参照されたい。

(11) 前掲注6のほか、古文書を対象とした事業ではないが、佐藤正三郎「地域博物館における『市民サークル主体型展示』の可能性～まちなみ研究会による歴史的建造物の活用とまちづくり～」(『野田市郷土博物館市民会館 年報・紀要』第3号、2011年)、加藤隆志「『市民参加』・『市民協働』と博物館—これからの博物館は何を目指すのか—」(『神奈川地域史研究』第30号、2013年)、刈田均ほか「横浜市歴史博物館『民俗に親しむ会』活動報告」(『横浜市歴史博物館調査研究報告』第12号、2016年)がある。

(12) 企画展に対する意見と感想の欄が空欄であったり、同じ記入者が複数の感想を記入することがあったりするため、アンケートの枚数と感想の件数の合計は一致しない。

(13) 明らかな誤字、脱字以外、アンケートの記入内容

をそのまま引用する。

(14) 長谷川伸「博物館における歴史展示と展示叙述—研究と展示の間を考える—」(『歴史学と博物館のあり方を考える会創立20周年記念誌 現場から 2』歴史学と博物館のあり方を考える会、2014年) p. 11

(15) 橋本雄「歴史展示、『伝えること』の難しさ」(『歴史学研究』854、2009年) p. 13

(16) 前掲注2、田中淳一郎(1990年)